



Good News for Japan **とぎのこえ**

母の愛と神の愛

太田 廣美



日本の救世軍の最初の士官であり日本の社会福祉の先駆者である山室軍平は、その母登毛について次のように回想しています。

軍平の母、登毛は、貧しい農家の八番目の末っ子として生まれた軍平の行く先を案じ、

「『神さま、どうかこの赤ん坊が無事で成人いたしますよう。また成人の後は、あまり人さまにご迷惑をかけるものでないか、どうか良い事をするものになりますよう。この願いの真実なるしるしに、わたくしは今から一生涯卵をいただきます』と足かけ三十年間、ついに一個の卵も食べることがあ

りませんでした。やがて、「わたくしのために真実至誠の祈りをこめつつ、世を去った」(山室軍平著「私の青年時代」(救世軍出版供給部)より)のでした。

母の愛、それは、子どものためなら、命が短くなってもかまわない、子のために自分の命も犠牲にする、というものではないでしょうか。登毛の姿に、そんな深い母の愛を感じます。

私の夫は子ども時代わんぱくで、よく近所で問題を起こし、母はいつも一緒に頭を下げに行きました。戦前、戦中、職業軍人であった父はとても厳格で、そんな息子に決まっつて「出ていけ！」と、家から出しました。彼が近くのお寺の境内や川原でしょんぼりしていると、夕方には必ず母が「晴久、晴久」と探しに来たという事です。母は九十三歳になる今も健在で一人暮らしをしています。そして、今でも離れて暮らす息子のために、季節ごとの野菜や果物、お茶、米やお菓子など送り、息子が夏休みに帰省すると、必ず帰り際に小遣いを持たせま

す。また、私と夫は、救世軍の児童養護施設で、毎月子ども集会(聖書のお話や、紙芝居、ゲームなど)をしています。いろいろな事情のため施設で暮らしている子どもたちですが、一年もすると驚くほどに背丈が伸び、笑顔を見せてくれるようになります。そんな時、母親代わりの職員に愛されて成長しているな、と胸を撫で下ろします。

私は約八年前、三男を自死で亡くしました。二十七歳でした。うつ病と診断されて以来、毎日大量の薬を飲んでいました。しかし、少しずつ良くなり先が見え

謹んで被災された方々にお見舞いを申し上げます。一日も早い心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

てきたように思った矢先、彼は逝ってしまいました。母親としてもつとできることがあつたのではないかと自分を責めました。今は、できることはした、と思えるのですが、その時は、無力感と、脱力感に襲われ、どうしようもありませんでした。

やがて、多くの方々の祈りや、聖書の言葉に励まされ、慰めをいただき、立ち上がる事ができました。「二羽の雀が一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。」(マタイによる福音書10章29、30節)

「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。」(詩編23編4節)

母の愛と神様の愛は似ていますが、大きな違いがあります。それは、人間の愛

には限界がありますが、神様の愛には限界がない、ということです。イエス・キリストは、あらゆる人の苦しみを背負って、わたしたちの身代わりとなつて十字架に架かってくださいました。神様は、その死によって、私たちのすべての罪を赦してくださいました。そして、

「…とこしえの愛をもつてあなたを愛し 変わることもなく慈しみを注ぐ」(エレミヤ書31章3節)

「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たに。…主に望みをおき尋ね求める魂に 主は幸いをお与えになる」(哀歌3章22〜25節)

お方です。限界のない愛をもって私たちを愛し続けてくださるのです。

五月は母を思う季節ですが、母の愛より深く、高く、絶えない、尽きない、神様の愛を信じ受け入れ、その人生を歩むことができます。ようお祈りいたします。

(救世軍士官(伝道者))

臨床心理士・行動分析学者で、発達障がいの子どものための問題行動を独自の方法で大きく改善させている、奥田健次さんにお話を伺いました。

「日本全国はもちろん、世界各国から指導依頼を受けて飛び回っておられるとのことですが、どのような指導をされているのですか。」

奥田 いわゆる問題行動のある子どもの家庭に行って、直接観察し、その子どもに合ったオーダーメイドの支援をしています。私が実際にやって見せ、同じことを親御さんに実践してもらいます。たった一回から数カ月と、問題の種類や個人差はありますが、必ず問題は改善しています。

「必ず改善する、ですか。」

奥田 はい、必ず。オーダーメイドでその子に合った改善プログラムを処方しますから、当然のように改善します。ただ、私のやり方は、マン

ガやテレビに取り上げられるくらいなので、従来のものとはだいぶ違うようです。関係学会においては異分子、一匹狼のような存在でしようね。

現在、最低でも月五十件以上上の相談を抱え、その他、病院や学校などでの相談、講演活動をおこなっています。

「異分子、一匹狼」の奥田先生は、どのような環境で育たれたのですか。

奥田 悪い環境で育ちました。私は両親とも音楽家の家に、三人兄弟の次男として生まれました。私が四歳の時に両親が離婚したので、父の記憶はあまりありません。

その後、母が、私たち子どもを連れて再婚しました。その直後から、私は継父に殴られる毎日となりました。三人兄弟の中で殴られるのは私だけ。同じことをしても、私だけに激しい暴力が振られるのです。頭や顔を殴られる、耳が裂けるほど引っぱられる、突き飛ばされる―殺されるか

と思うほどの暴力でした。

「そのような虐待を、学校や周りの人たちは問題にされなかったのですか。」

奥田 当時は何が「虐待」という意識は不十分な時代で、むしろ、継父の行動は、熱心に躾をしている、血のつながらない子どもへの愛情の表れのように受け取られていました。ですから、家に帰るのが恐ろしくて、よく家出をしました。そして、連れ戻されては殴られる。また万引きをしては捕まり、家に戻って暴力を受ける―そんなことを繰り返す小学生時代でした。

中学生になると、いじめに遭うようになり、三年生では完全不登校になりました。

「壮絶な子ども時代を過ごされたのですか。」

奥田 でも、それがあつたらこそ今の私があり、現在の働きをするようになったので、恨んではいません。こんな環境の中で最悪な少

年期を過ごした私ですが、幼

い頃から、母に連れられてキリスト教会の礼拝に出ていました。不登校になり、別のキリスト教会でドイツ人宣教師のゴットホルド・ベックさんと出会い、父親の温かさを感じたのでしようね。ベックさんは学校に行かない私を優しく受け入れてくれました。

でも、高校生になってしばらくすると、ベックさんは「しっかりと社会人にならなさい」とおっしゃいました。真剣な眼差しでお話しいただき、自分に重く響きました。優しさだけではなく、真剣に私のことを考えて論じてくれた人は初めてでした。

「それで、真面目に将来のことを考えられたのですか。」

奥田 進路を考えた時、妹の扱いが上手で、子どもたちには好かれていたので、幼児教育の分野に進もうと思いました。そして働きながら、夜間の大学、大学院に通いました。

行動分析学を専門にしたのは、たまたまの出会いからです。幼児教育、心理学などを学び研究していくうち、発達障がいの子どもの困っている親の役に立つ分野を目指すようになりしました。その中で出会い、生意気な自分をかわいがってくださったのが、行動分析学の先生方だったので、支援方法として効き目のあるものをさがした時に、出会ったのが行動分析学だったということでした。

「神様を信じたのはいつ頃ですか。また、どう変わられたのでしょうか。」

奥田 小さい頃からキリスト教会の中で育ったので、いつ、ということにははっきりしないのですが、成人になって、主を畏れて―神様のみを信じ、敬い、ゆだねて―歩むようになりました。

どのように変わったか、というと、神様以外の何ものも死をも、恐れないようになりました。この世の生を終えても、私には行く所―天国がある、そのことを確信して生きようになったのです。

また、別の意味で―死ぬほど暴力を受け、さんざん痛い目に遭ってきたので、人を恐れなくなりました。世の中、怖いものはありません。

「具体的には、どのようなこ



大学教員として幼稚園で活動

とですか。

奥田 不正や間違っていることは、見過ごすことができずとも、間違っていることは「間違っている」と言ってしまう。黙っていられないのです。そのため当然、組織では毛嫌いされてしまいます。三十代には、職場を相手に訴訟を起こしました。助手をしていた大学が、国からの研究補助金を目的外で使用しようとしたのです。それに反対したら、大学でアカハラ(職場いじめ)が始まりました。

研究室が奪われ、大学院スタッフから外され、昇格予定を取り消されました。五年目に辞表を提出した後、大学に対する私一人の孤獨な闘いとなりました。そして、九年もの時を経て、最高裁で勝訴したのです。

「九年間とは、すごいエネルギーですね。」

奥田 その間、「賠償金はすべて神様に献げますので、真実を明らかにして勝利させてください」と祈り続けました。

生活も将来も幼稚園も すべて神様におゆだねして

〈インタビュー〉

奥田健次さん





子育て講演会

そして勝訴となり、心に誓ったとおり、賠償金の全額を無記名で献げることにしたのですが、この時、自分の弱さをいやと言うほど思い知らされました。

これまでこんな大金を一度に献げることがなかったので、礼拝の中で献金袋が回ってきた時、恥ずかしいことに気を失いかけてました。(苦笑) すぐに必死で祈り、すべて献げることができました。神様にすべてを献げる、後のことはすべてゆだねる、ということをも身をもって味わった時でした。

—現在、長野県西軽井沢で幼稚園を開園予定とか。

奥田 はい。「サムエル幼稚園」です。奥田学園、奥田幼稚園とはしませんでした。金や名誉で狂わされた人を山ほど見てきましたから。

サムエルは、旧約聖書に出てくる人物の名前です。サムエルはまだ幼い時、神様に仕える祭司エリのもとに預けられ、育てられました。しかし、このエリは、自分の子どもた

ちがおこなう悪事を知っていたながら何もしなかったため、神様の言葉のとおりその家系は全員滅ぼされてしまいました。

子どもの指導も大事ですが、親に対する指導、つまり親育てに力を入れるというのが幼稚園の目指すところですよ。

—「親育て、ですか。」

奥田 今、自分の子どもを教育できない親がどれほどいることか。子どもの感情に振り回されることで苦しんでいる親子がたくさんいます。親にしっかりとした土台があれば、子どもは良く育っていくものです。

定員は三十五人。障がいのない子もある子も一緒に教育する—インクルーシブ幼稚園として認可され、来年の四月開園を予定しています。

—お忙しく飛び回っておられるのに、その上、なぜ、幼稚園をつくらうと思われたのですか。

奥田 以前はワーカホリックで、週七日、休みなしで仕事をしていました。人の三倍も四倍も仕事をして、お金を使う暇もなかったので、どんどん貯金が増えていきました。ある時、通帳を見て「この世界はこれからどうなるかわからない。お金の価値も十分の一、百分の一になるかもしれない。自分のために貯め込まず意義のあることに使おう」と思ったのです。

それで、軽井沢に土地を買って、高齢者の施設をつくらうと計画しました。ところが、この地区は高齢者の施設は十分足りている。むしろ、足りないのは、幼稚園や発達障がい児のデイサービスだとのこととで、幼稚園に決めたのです。決意してから三年、あちこち土地を探したのですが、良い所が見つからずにはいまいた。でもその後、神様のお導きとしか思えないことが起こったのです。

—お導きとしか思えないこととは？

奥田 不動産屋から、良い物件がある、と紹介されたのが、なんと私の書斎にしていた別荘の真ん前の土地五千坪！もちろん、不動産屋はそんなことは知りません。私も知らぬ顔をして値段交渉をし、後日、購入契約に至りました。自分の力に頼るのではなく、祈って待つこと、そして神様の御心のみが成る、ということを教えられました。

それから、幼稚園設置認可を、全額自己資金だけでは無理だったので、一部借入れを計画して、申請しました。当初、県の担当者の助言に従って自己資金を少し残したのですが、そのために設置審議



サムエル幼稚園設立準備関係者と

会にかけてもらえず、翌年、全額寄付することにして、ようやく認可が下りました。

それでも一年分の生活費くらいは、と残していたものもあつたのですが、最終的な工事金額が増えて、その増額分がちょうど残しておいた生活費の額だったので。神様はすべてをご存じだ、私の財布の中身まで(笑)、と何だか逆にうれしくなりました。

—貯金がゼロになったわけですが、不安はありませんでしたか。

奥田 むしろ、神様は必要なものは必ず与えてくださる、という信仰が与えられました。私は理事長になりますが、理事長報酬はゼロです。神様を信頼して歩むなら、死ぬまでの間、神様が何とかしてくださいます。私の髪の毛の本数だけでなく財布の中までも知っておられるのですから(笑)。神様は生きておられる、とい

うことを確信しています。

—先生のこれからの予定は？

奥田 相変わらず、私のスケジュール帳は真っ赤です。困っている親子を助けに行くことが私の仕事なので、日曜日も予定で埋まっています。でも、まず礼拝の時を優先して、そのほかの時間をこの働きに当てています。

実は今、『ソロモンの知恵に学ぶ子育て本』という本を執筆するよう依頼されています。聖書の箴言を中心に、聖書全体が子育てにどのような

メッセージを送っているのか、という内容です。私の原点は聖書なのですが、今までこの原点から発信したことがありませんでした。死ぬまでに書かなくては、と考えていたものです。

まずは、幼稚園が開園しますのですが、金銭的には貧しいままですが、しっかりとした親育て、子育てをやっていきたいと思います。

*新約聖書マタイによる福音書一〇章二〇節「あなたがつたの髪の毛までも一本残らず数えられている——神がすべてをご存じで、従う者を守ってくださいることが述べられている。」

奥田健次(おくだけんじ)さんプロフィール
兵庫県西宮市出身。臨床心理士、行動分析学者。発達障がいの子どもや家庭の支援要請に応え、日本国内のみならず世界各地を飛び回る国際的セラピスト。一九九九年、内山記念賞(日本行動療法学会)を受賞、二〇〇八年には第四回日本行動分析学会学術賞(論文賞)を受賞し、行動科学系の二大会で初のダブル受賞者となった。ほかに、二〇〇三年、日本教育実践学会研究奨励賞を受賞している。

現在、一般社団法人日本行動分析学会理事、日本子ども健康科学会理事、桜花学園大学大学院客員教授、法政大学大学院ライフスキル教育研究所客員教授、慶應義塾大学大学院の統合的研究センター進化・発達プロジェクト共同研究者などを歴任。行動コーチングアカデミー代表、学校法人西軽井沢学園理事長として二〇一八年四月にサムエル幼稚園を開園予定。

著書は、『メリットの法則 行動分析学実践編』(集英社)、『世界に一つだけの子育ての教科書』(飛鳥新社)、『マンガ版 拝啓、アスベルガー先生』(飛鳥新社)、『マンガ 奥田健次の出張カウンセリング 自閉症の家族支援物語』(スペクトラム出版社)など多数。

裏
この部分を封書か葉書に貼り、
面下の救世軍にお送りください。

クリトリ

— 氏名

— ご住所

□ 私の近くの救世軍を紹介してください。

□ キリスト教についてもっと知りたいです。

□ 「ときのこえ」の購読を申し込みます。

創立者 ウィリアム・ブリス 大将 アンドレ・コックス (万国本営 英国ロンドン)

日本司令官 ケネス・メイナー (救世軍本営 東京都千代田区) <http://www.salvationarmy.or.jp>



世界をみつめて

〈イギリス〉ストロベリー・フィールドで、新プロジェクトが始動

ビートルズの名曲で歌われ、その名が世界中で知られている「ストロベリー・フィールド」。それは、イギリスの北西部に位置するリバプールにあった、救世軍の児童養護施設の名称です。ストロベリー・フィールドは、救世軍に寄贈されたビクトリア朝の建物を有し、1936年、戦争で



家族を失った子どもたちのための施設としての働きを開始しました。以来、家族と暮らすことのできない子どもたちの施設として地域の子もたちを支えてきました。2005年にその働きを閉じましたが、今年2月、救世軍は、この施設の再開発計画を発表しました。施設周辺地域だけでなく、全世界にアピール性をもつという幻をもっています。まず、障がいをもつ若者のためのトレーニングと作業所としての働き—食事のケータリング及び店舗販売、訪問者を迎える経験、園芸などの職業訓練の機会が提供されます。さらに、ジョン・レノンにちなんだ展示会が開かれ、快適でスタイリッシュなカフェもオープンします。緑豊かな庭園は公開され、来場者は、ジョン・レノンが子どもの頃遊んだ庭を散策し、彼が登った木々や夏期に昼寝した木蔭を楽しむことができますようになります。

他に、音楽ワークショップが開かれ、若者たちが音楽を通して

技能を磨き、創造性を広げることができるよう計画されています。そして、人々の霊的な探究や静まりの時、信仰的な導きを受ける働きもおこなわれます。詳細は、新プロジェクトのためのサイト(写真左・英文)にて、献金のお願いとともにご紹介されています。(http://www.strawberryfieldliverpool.com/)

〈全世界〉子どもたち、青年たちが主体的に活躍

救世軍は、今年一年「全世界がともに動く 前進しよう！」キャンペーンを全世界規模で展開しています。

3月24日(金)～26日(日)は、特に子どもたち、青年たちが中心となって、世界各地で地域の人々に福音を伝え、奉仕する働きに取り組みました。日本では、この期間中おこなわれた行事の中で、地域の公園でのゴミ拾いや、地域の子もたちのためのイベントを開催しました。



〈モザンビーク〉サイクロンの被災地支援



アフリカ南部に位置するモザンビークに、10年ぶりにサイクロンが上陸しました。救世軍では早速、被災地の街頭生活者をはじめ、貧しい人人へ465家族分の食料を届けました。

救世軍とは

The Salvation Army

プロテスタントのキリスト教会で、世界百二十八の国と地域で働きを進めています。

創立者はイギリスのメソジスト教会牧師だったウィリアム・ブリス。一八六五年、ロンドンの貧しい人々や社会から顧みられない人の物心両面からの救いをめざして、この働きを始めました。百五十二年経った今もその精神は変わらず、助けを必要としている人々のニーズに応えながら、神様の愛を伝えていきます。

日本での働きは、一八九五(明治28)年に始まりました。その当初から、刑を終えて出てきた人々の保護や職業訓練、災害被災者慰問、失業者のための職業斡旋、廃娯運動の推進、結核療養所の設立、子どもの保護……などを積極的におこない、明治、大正、昭和初期の社会福祉史に、先駆者としてその足跡を残しました。

社会鍋募金へのご協力を感謝いたします！

昨年12月も、社会鍋募金にたくさんの方々からご協力をいただきました。心からの感謝とともに、結果をご報告いたします。

北海道地区	873,266
関東東北地区	673,710
東京・神奈川地区	11,421,649
東海地区	463,335
関西四国地区	2,015,603
中国九州地区	1,112,229
合計	16,559,792

(2017年3月31日現在)

集められました寄付金は、救世軍がおこなう様々な支援活動に用いさせていただきます。

発行日 毎月一日・十五日
 発行日及び定価
 一日号 一部四〇円(〒六〇円)
 十五日号 一部六〇円(〒六〇円)
 クリスマス特集号(十二月一日号)
 一部一〇〇円(〒七〇円)
 一年分 二六〇円(送料七五〇円)
 振替 〇〇一八〇五四四〇〇

印刷所 救世軍本営
 印刷兼 救世軍
 代表者 ケネス・メイナー
 編集人 寺澤 真由子
 〒101-0051 東京都千代田区
 神田神保町二丁目十七番
 電話 東京(03)三三七〇八八一
 救世軍本営
 図書印刷株式会社

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

母の日の由来

母の日は、アメリカのア州に住むアンナ・ジャービスという人が、日曜学校の教師だったお母さんの記念会をおこなったことがきっかけで、始まりました。生前、アンナのお母さんは、聖書の「あなたのお母を敬え」(出エジプト記20章12節)ということを子どもたちに教え、お母さんに感謝の気持ちを表すことの大切さを語っていました。このことを心にとめていたアンナは、「母の日」をつくって、感謝の気持ちを表しましょう」と言いつつ、お母さんの好きだったカーネーションを集めた人々に配りました。この考えに賛同した人々が集まり、次の年、教会で第一回目の「母の日」礼拝をおこないました。これが国中に広まり、一九一四年、アメリカの議会で五月の第二日曜を「母の日」にすることが決まりました。

日本でも一般に祝われるようになったのは、一九五〇年頃からと言われています。